

論文の和文要旨	
論文題目	現代中国語における進行・持続の事象を表す “正 VP” “在 VP” “正在 VP” に関する研究
氏名	王 棟（オウ トウ）WANG Dong
“正・在・正在”は述詞性成分（VP、動詞性成分・形容詞性成分）と共起し、“正 VP”・“在 VP”・“正在 VP”構文（以下“正／在／正在 VP”）を構成できる。そのうち“正／在／正在＋動詞性成分”は例えば“正低声呻吟”（低い声でうめいている）・“知识资本在升值”（知的資本は高く評価されるようになりつつある）・“白金正在跌”（プラチナの値段が下がっている）が挙げられる。また、“正／在／正在＋形容詞性成分”として、例えば、“正犹豫”（躊躇している）・“在伤心”（悲しんでいる）・“正在害羞”（恥ずかしがっている）が挙げられる。本研究の対象は進行・持続の事象を表す“正 VP”・“在 VP”・“正在 VP”構文である。 本研究は六章から構成されている。 第一章では、まず本研究が注目するのは進行・持続を表す、類似する“正 VP・在 VP・正在 VP”であることを簡単に紹介した。そして、本研究の各章の概要を述べてから、本研究が使用する言語データの紹介を行った。 第二章では、“正・在・正在”の違いに関する先行研究を概観した上で、それらの成果と限界を明らかにし、本研究の研究課題を明確にした。先行研究では、初期にはほぼ同様に説明されていた“正・在・正在”が次第に区別されるようになってきている。また、いずれの先行研究においても“在”は進行・持続のマーカーとして認められるのに対して、“正”と“正在”の捉え方は単純ではないことが伺える。その結果、“正・在・正在”三者の異同の把握に関しては複数の立場が見出せた。しかし、先行研究の限界としては、“正・在・正在”と述詞性成分との共起現象が詳細に考察されてこなかったことと、できるだけ多くの言語現象を統一的に説明できる捉え方に	

関して議論されてこなかったこと、進行・持続のマーカ―の議論を通して進行・持続という概念の本質に迫る試みがされていなかったことが挙げられる。こういった先行研究への批判的検討を通して、本研究の研究課題を具体化し、次の第三章から第六章にかけて研究課題に対して考察を行った。

第三章では、先行研究において詳細に議論されてこなかった“正・在・正在”の意味解釈と共起成分との関係を考察した。17の種類の述詞性成分を“正・在・正在”と共起する成分の例として考察した。その結果、17の種類の“正+VP”における“正”を、「プロセスの進行の時間と参照時との一致性」を表す“正1”・「状態の持続の時間と参照時との一致性」を表す“正2”・「達成の瞬間と参照時との一致性」を表す“正3”・「認識の内容と参照となる命題内容との一致性」を表す“正4”・「対象物の移動の着地点と参照空間との一致性」を表す“正5”に分類した。また、この五つは認知ドメインのレベルにおいて、時間的一致性に関わる“正”（“正1”～“正3”）と、認識的一致性に関わる“正”（“正4”）と、空間的一致性に関わる“正”（“正5”）の三つのグループに整理できることを示した。さらに、認知ドメイン上の違いを捨象すれば、“正”の基本的な意味は「参照と対象との一致性を際立たせる」というように記述できることを述べた。このように、“正”の意味は「実例における機能のレベル」（“正1”～“正5”）、「認知ドメインのレベル」（時間的一致性・認識的一致性・空間的一致性）、「認知ドメインの違いを捨象するレベル」（参照点と対象との一致性）に分けて記述することができ、階層的（hierarchical）であることを主張した。また、“正／在／正在 VP”の三つについて、①述詞性成分 VP の種類の数という観点から、“在 VP” < “正在 VP” < “正 VP”であること、②“在・正在”はプロセスの進行を専らマークする傾向が強く、“正”はプロセスの進行・状態の持続・達成の瞬間を表すこと、③“正・在・正在”の類似性の本質は、多くの種類の述詞性成分が“正・在・正在”と共起する際に、“正／在／正在 VP”は進行中のプロセス・持続中の状態を表すことであること、④“正・在・正在”の類似性はそれらと共起する VP の種類によって説明・予測できること、⑤進行中のプロセスを表す構文

は、典型的な進行アスペクトマーカースとされる“在”・“正在”によって構成されない場合があることがわかった。“正・在・正在”と述詞性成分との共起可能性と、事象のアスペクチュアルな性質の異同を図示した。

第四章では、進行を表す“在”と“正”の異同に着目して、言語現象を記述した上で、両者の意味的・統語的な性質をまとめた。さらに、両者の異同を示す言語現象は、果たしてどのような一般的な認知能力によって動機付けられているかを考察した。先行研究の知見を踏まえながら、文中における“在”と“正”の異同を示す言語現象を8つの項目にまとめることができた。また、両者の異同を示す言語現象を統一的に説明する観点から、“在”は、対象事象を直接把握する参照点独立型認知モデルであるのに対し、“正”は、参照点事象を経由して対象事象を把握する参照点依存型モデルである、という捉え方を提唱した。

第五章では、“正在”の性質に着目し、先行研究の捉え方を①“正在＝正＋在”・②“正在≡正”・③“正在≡在”の三つの整理した上で、先行研究の捉え方に見られる争点を踏まえ、「“正在”を一語として認めるべきか」と「“正在”の性質と“正”・“在”とはどのような関係なのか」との二つの研究課題を設定した。前者の課題を朱徳熙 1982《语法讲义》が提唱する語の判定基準を援用して考察した結果、“正在”の構成成分である“正”・“在”は多くの述詞性成分と組み合わせられることと、文中において構成成分“正”・“在”の間にほかの表現形式を挿入できることから、“正在”は一語として見做すより、“正”と“在”との共起として見做すべきだと結論した。また、後者の課題については、第三章と第四章の結果を踏まえて相違点1～13に分けて“正・在・正在”の相違点を記述した。また、“正在”の性質を考察した結果、“正”と“在”の違いを示す言語現象と、両者の性質的な対立の観点からは、“正在”の現象を説明しにくいことがわかった。このことから、語の認定の観点から“正在”は一語ではないものの、一つの複合的表現として“正在”を認識する価値があると主張した。

第六章では、“正在”と動結式の共起形式“正在+VR”の容認度の分析を通じて、進行・持続という事象認識の成立条件を考察した。その結果、状態変化事象の進展の認識基盤となる概念について、(i)「事物の部分的変化」(ii)「状態の程度的変化」の2分類を提案した。状態変化事象が進展の段階を持つと認めるには、最低でも進展の認識基盤となる概念(i)事物の部分的変化と(ii)状態の程度的変化のうちの一つが必要であり、その両方に基づく場合も存在することを述べた。また、認識基盤(i)・(ii)が成立しやすい場合の形式的な特徴を提示した。また、進行・持続は、事象が持続的(continuous)か瞬間的(punctual)かという二項対立で捉えられるのが一般的であるが、本研究は進行・持続という認識は「時間の長短」を感じ取る認知能力だけでなく、事象の構成状態と構成状態との違いを比較して「状態の違い」を感じ取る認知能力にも関わっていることを主張した。

以上まとめてきたように、本研究は、進行・持続に関わる“正・在・正在”三者の異同のパターン化と、“在”と“正”との違いの統一的な説明、及び、“正在”と他の二つとの関係と、進行・持続という概念の分析を行った。

現代中国語に複数の進行アスペクトマーカの存在が注目されてから四十年余りが経った。本研究の今までの議論との違いは主に以下の三つである。まず、今までの議論で取り上げられてきた言語現象は複雑に交錯しているが、本研究は今までの議論に見られる言語現象のほか、さらに実際の言語使用に見られる用例を収集・整理・記述した。そして、本研究は認知言語学的な考え方を援用し、これまで着目されてこなかった理論言語学的なレベルから考察した。また、アスペクトマーカにまつわる現象の分析を通して、マーカ＝標識の背後にある概念の特徴の分析を試みた。“正・在・正在”を考察する際に、本研究の方法論は言語現象を堅実に整えてから、文法記述と理論的な探求を行い、また、文法標識の考察を踏まえて文法概念そのものの考察へ発展させるといった特徴を持つ。